

「終わりは始まりに」

ルカによる福音書 24章 1節～12節

説教 本庄 侑子 牧師

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。」(5節) 主イエス・キリストの墓に行った女性たちが聞いた言葉です。彼女たちは主イエスとずっと一緒にエルサレムまで旅をしてきた女性たちで、主イエスとその弟子たちを支えてきました。この女性たちは、主イエスのもとで大きな安心と将来への希望を抱いていたのですが、主イエスは十字架につけられてしまいました。このとき女性たちは何もできませんでした。これからどうして生きていったらよいのかと考えたことでしょう。ヨセフという議員が総督ピラトに主イエスの遺体の引き取りを願い出た(23章52節)ときも、女性たちは何もできませんでした。

主イエスが墓に納められたとき、ユダヤでの安息日が始まりかけていたので、女性たちはその安息日が明けた日曜日の朝に、香料を塗るために墓に行きました。それでも死んだ人に会いに行くことには変わりありません。彼女たちは、主イエスの遺された言葉を心に刻んで過去の思い出に生きようとしたのでしょう。女性たちはもう終わりだと思っていた。弟子たちの場合、彼ら自身が主イエスの死に加担し、主を捨てて逃げていったのです。ペテロにいたっては、3度にわたって徹底的に主イエスとの関係を否定しました。

しかし、女性たちが墓の中に入ってみると、主イエスの遺体は見つからなかったのです。主イエスは過去の人ではなく、終わりにとどまる人でもなく、死や罪の力を打ち破って新しい命に生きられるようにしてくださる方です。主イエスは、最後の晩餐の時に「もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きるの、あなたがたも生きるからである」(ヨハネによる福音書14章19節)とおっしゃっていました。旅の終わりだと思っていた墓が新しい始まりだったので。

主イエスの復活ののちに何があったかについては使徒行伝に書かれています。主は天にのぼられ、天から聖霊を注いで教会を建てられたのです。その物語は今も続いています。私たちが主に結びつけられ、主をかしらとする教会で礼拝を守っていることが何よりそのことを物語っています。

弟子たちが味わったような死を私たちも経験します。女性たちや弟子たちのように、自分の無力さや罪に涙して、自分は死んだ人としてとどまるのではないかと思うときもあります。しかし私たちは、よみがえったキリストの命に結ばれたものとして前に向かって進むことができるのです。

8年前、私は献身の思いを与えられて東京神学大学に入学しました。とても暗い顔をした私を見て、ある牧師は「金曜日では終わらない。日曜日に来る。だから罪深い私も、牧師としてここまでやってこられました。」と言いました。大阪教会の伝道師・牧師としてつかわされた4年間も、一生懸命してもどうにもならないことがあると思い知らされました。神学を学んで教会のためにつくことができると思っていたが、自分の無力さを味わうことになりました。それでも、主イエスが生きて働いてくださるのです。主のご計画に私を用いてくださるのです。それに気づいたとき、どれほどみじめな金曜日があっても、罪深さに打ちひしがれる土曜日があっても、日曜日に来るといふ、あの牧師の言葉を思い出したので。

今日は、大阪教会では、特別な思いの中で迎えるイースターです。先週の半ばに岡村 恒牧師は旅立たれ、新たな主任牧師はまだ与えられていません。しかし、終わりを始まりとされる主イエスは、新しいご計画を携えて、この大阪教会にもものぞんでくださり、日曜日ごとに私たちを招いてくださるのです。

私たちの究極の行き先は、死であり、墓であります。そこでも、主イエスは生きておられます。墓は終わりの場所ではありません。永遠の目覚めへと向かう新たな始まりの場所です。

午後の墓前納骨追悼礼拝では、ひとりの兄弟の納骨が行われます。この兄弟も信じてきた主イエスが生きておられるように、兄弟も生きるのです。

これまでと同じように、これからも、日曜日ごとに礼拝を捧げましょう。主に結びつけられたものには、つきぬ命が与えられます。主は復活されました。イースターおめでとうございませぬ。

(記 説教要約奉仕者)